ニュース

食事調査、13年度も継続実施

コープふくしま

コープふくしまの「実際の食事に含まれる放射性物質量の測定」（以下、食事調査）は、11年11月から開始され、12年度には2回行なわれました。継続した測定を実施していることから、行政や学術組織などからも、その結果に注目が集まっています。

食事調査の説明会に41人の組合員が参加

13年6月19日、20日、「実際の食事に含まれる放射性物質量の測定調査参加者のつどい」が、郡山さんかくプラザ（郡山市）、コープマートいずみ（福島市）の2会場で行なわれ、計41人の組合員が参加しました。

両会場とも、測定を行なっている日本生協連商品検査センターの職員が、放射能についての解説と調査の具体的な説明を行ないました。その後、福島県立医科大学 放射線健康管理学講座の宮崎（みやざき） 真（まこと）さんから、体内の放射性セシウムのおよその量を測定するホールボディーカウンタ（WBC）についての説明がありました。食事調査とWBC測定を組み合わせることには意味があります。仮に食事調査から検出限界値以上の数値が出たとしても、WBCの測定を定期的に受け、そのデータを見ることで、たまたまそのとき検出限界値を上回る食事を取ったのか、それとも恒常的に取っているのかが、推測できるのです。そして、今後の食生活について見直すきっかけにもなります。

コープふくしま常務理事の宍戸（ししど） 義広（よしひろ）さんは、「漠然と『安全』というイメージではなく、定期的に食事調査やWBCの測定を受けることで、実態に基づいた判断ができるようになります。生協でも、病院や医科大学と協力してWBCによる測定もやっていますので、ぜひ参加してください」と呼び掛けていました。

会場では、食事調査に初参加する予定の組合員に対し、参加経験のある組合員がアドバイスなどをしている姿が印象的でした。

食事調査の取り組みを、「食育推進全国大会」で発表

13年6月22日に広島県広島市で「第8回 食育推進全国大会」（主催・内閣府）が行なわれ、パネルディスカッション「つくる人、売る人、食べる人、みんなの力でつなげる・広げる食育の環」の報告者として、コープふくしま組合員理事の小澤和枝（おざわかずえ）さんが登壇しました。

小澤理事は、「原発事故による放射能汚染に向き合って」をテーマとし、コープふくしまが日本生協連商品検査センターと協力して11年度から行なっている、食事調査の結果報告をメインに、ホールボディーカウンタ（WBC）の測定の取り組みなどについて報告しました。パネルディスカッションの聴講者は、グラフなどで示される調査結果を見ながら、熱心に耳を傾けていました。

「食育推進全国大会」のパネルディスカッションに登壇した小澤理事（写真左）。

発表を終え、小澤理事は、「『食』に関係する方々が全国から集まる大きな大会で、福島のことを伝える機会を頂戴し本当にうれしく思います。取り組みを伝えることで、福島の現状を正しく理解していただき、イメージではなく、それぞれの方のものさしで考える機会としていただきたいです。そして、多くの方に、『買って支える』という支援の仕方があることを知っていただけたらと思います」と話していました。

組織として買って支える取り組みを行なっている生協についても、紹介がされていました。